「連句の方則」（秋季研究会の講演要旨）

市川　浩司（俳号・千年（せんねん））

寺田寅彦が愛した文芸「連句」について令和六年十月二十日、寺田寅彦記念館で講演させていただきました。演題は寅彦にならって「法則」でなく「方則」の言葉が、演劇的な要素のある連句の遊び方に合っていると感じていたので「連句の方則」としました。芭蕉の発句「古池やかはづ飛びこむ水の音」にも高弟・其角の「芦のわか葉にかゝる蜘の巣」という七七（短句）の付け句（脇句）があることから話を始め、連句は複数の人が「付け」と「転じ」を楽しむ文芸であることを実作例をあげつつ説明しました。が、なかなか実際の付け合いを体験せずに、不連続の連続感のある連句を分かっていただくことは難しい。そこで、国文学者の谷地快一、丸山一彦両先生の連句認識の基本となる次の文章を引用しました。谷地先生は芭蕉会議という俳文芸同好の人の集まりを主催され、私も同会議の会員です。

「俳句とは何かを問われて、〈連句の発句が独立したもの〉と答える人が少なくない。だが、この答えは誤りである。なぜなら、連句の発句は俳句と呼ばれる前から独立していて、なにものにも依存しておらず、あらためて独立する必要はなかったからである。

灰汁桶の雫やみけりきりぎりす　　凡兆
あぶらかすりて宵寝する秋　　芭蕉

右は『猿蓑』という俳諧撰集の、芭蕉とその門弟による連句の冒頭二句である。発句とは連句の発端の句という意味で、この「灰汁桶の」という句を指す。句意は、洗濯や染め物に用いる灰汁がしたたり落ちる音と入れ替わるように、こおろぎ（昔は「きりぎりす」と混同された）の声が高く聞こえはじめたというもので、晩秋の夜更けの寂寥感を描いている。脇句と呼ばれる第二句は、行灯の油が少なくなって、早寝をしてしまった民家の様子だが、これは発句の余情に形を与えたものであって、不足を補ったものではない。余情は発句の完成度に比例してあらわれる。つまり近代俳句においても、すぐれた作品は常に脇句をもたらす深みを持っている。俳句と発句はいまだに同じものなのである」（谷地快一「俳句的ということ」　片山由美子・谷地快一・筑紫磐井・宮脇真彦編『俳句教養講座　第一巻　俳句を作る方法・読む方法』角川学芸出版　平成二十一年）

「連句は、長句（五・七・五）と短句（七・七）を交互にくりかえし連ねてゆく文芸形式である。連句の進行をおもしろくするには、まず「三句のわたり」に留意しなければならない。三句とは、与えられた〈前句〉、

それに付ける〈付句〉、前句の前の句（打越（うちこし））の三つをさす。作者は前句から連想して関連のある情景・場面を付けるのだが、その際に打越にもどらず、新たな展開をはからなければならない。芭蕉が「一歩もあとに帰る心なし。行くにしたがひ心の改まるは、ただ先へ行く心なればなり」（三冊子）と説いたのは、その付け方の呼吸を言ったもので、付句は常に打越から離れて、先へ先へと新たな変化を求めてゆかなければならないのである」（丸山一彦「連句の楽しさ」　丸山一彦・わたらせ連句会編著『句集　無絃琴　連句　故旧輪唱』　平成十三年）

実はこの講演に先立って「あゝの会」という私の属する連句会で、寅日子の句を発句にいただき、半歌仙（表六句、裏十二句）を巻いてもらいました。会場でその作品は配りましたが、ここではその四句目までを紹介します。

客観のコーヒー主観の新酒哉　　寺田寅日子
　有無を言はさず秋刀魚に酢橘　　山地春眠子
猫の目の浄くも険し弦月に　　大家　雅子
　へこんだままの先生の椅子　　瀬間　文乃

現場に居なかった私が解説すると、まず秋は三句続けるという連句の決まり（式目）があるので、脇句は秋の句で受ける。新酒（晩秋）とくれば秋刀魚（晩秋）と酢橘（晩秋）。一句のなかで季語は一つでいいのですが、日本酒好きの春眠子さんですので仕方なし。次は月（三秋）、秋の発句では、脇か第三に月を入れるのが定石。秋刀魚とくれば猫、寒月君も浮んだでしょうね。四句目は雑（無季）の句で軽くへこんだ（漱石）先生の椅子を配置しましたね・・・とまあ当らずも遠からずの付け筋の表層的解読でした。複数の人間がこの客観の句から始まる俳諧の座を盛り上げていこうと対面で連想の世界を広げていくわけです。

最後に芭蕉会議の連衆と昨年十二月にメールで巻いた表合せ八句という形式の連句を紹介します。雑の句を挟むことが連句の幅を広げます。寺田寅彦顕彰に連句は必須です（笑）。

先生と話して居れば小春かな　　寅日子
　今年もしかと咲きし山茶花　　千年
リハビリの妻を励まし唄ふらん　　瑛子
　ドナウの岸辺歩きましたね　　由美
日時計となるやもしれぬ摩天楼　　千年
　パリパリスーツ闊歩就活　　窓花
飼い猫の腿に乗りくる花筵　　真美
　いつかひばりになって春風　　執筆